

後期高齢者通知

柏崎

睦 岩手

もつもつと降り積む雪は片栗のあかむらさきの芽を覆ひゆく
盛岡の寒さの底も尽きたりと安堵のおもひふつと湧く
路の薑味噌をうましと食べゆけり息子四十六歳の春
今日からは後期高齢者になると通知一枚かるがると来る
枯れしまま冬中散らない柏葉を自慢のごとく言ひぬしよ夫

復興疲れ

薄葉

茂 宮城

あの嫌な復興ソングの時期が過ぎごく穏やかに花は咲き初む
この朝は鹿落坂しちろさかをくだりゆく若木の息に押されるやうに
夜勤から日勤になり気づくのはたとへば鳥の声のまぶしさ
色の濃き河北新報の八重ざくら復興疲れの濃さにも見える
どの面が好きなのだらう気になりて新聞掲示を読む人を見る

星がこぼれる

宮崎

小夜子

群馬

さくら花ほのあたたかく薫りゐて原発ゼロの世はつくれない
0の埒の奥にあるらし無音にて無色無限の放射性物質
日の丸にご挨拶するとぼけ顔に星がひゆんひゆんこぼれてゐます
ぴよんぴよんといつも跳ねてた小父さんが空まで跳ねて来ない
生きてゐて良きか悪しきか考へる雲がため息つくやうな昼

みづあさぎいろ

尾崎潤子 千葉

三月は空のどこかに調律師みてうつくしき音階さがす
病室の窓から父と見し空のあれは早春のみづあさぎいろ
どことなく鬢付け油の香りして両国駅にふかく息吸ふ
はなびらの重なりふかきうすべいのラナンキュラスに秘密を話す
われの娘に生命が生まれくるといふ光のやうな八月待たむ

天の吐息

松尾佳津子 東京

膝病みてねむれぬわれにいつよりかあくびは天の吐息のごとし
窓ごしに早春の朝の空見つ少しづつ身の浮きゆく感じ
子と孫と曾孫と暮す老後なり九十過ぎの一日、一日を
いたぶつたいたたぶつた桃の咲く道をゆつくり膝かばひゆく
新潟の米「こしひかり」いただきぬこの頃行けぬふるさとの米

黄身と白身

真島陽子*新潟

混ざらない黄身と白身の関係はそのままが良しじゆわわんと焼く
ひとすじの飛行機雲が君逝きし空に生まれる淡青の春
抽出しを開ければ鼻炎カプセルの季節に戻る 子のいない部屋
シウマイにはグリーンピースがのっついていて歳重ねゆく日々の楽しさ
春開けてへマジマをマシマと疑わぬ人へに加える新しき人

風道走る

漆崎健一郎 福井

雨白く打つ濠の面を暗ぐらと押し拵げつつ風道走る
春分を待ちゐしごとく鶯が未だ明け切らぬ庭の樹に鳴く
予後の身を氣遣ひながらほつほつと畑の仕事も熟こまして行かな
前を行く若き二人が嬰兒を籠に下げ持つペットのごとく
コルセット外せば呪縛解かれたるとき老いの身夜の湯にほぐす

改元の波

中西正博 兵庫

大空を裳裾なびかせ佐保姫の舞ひてゆきしか 辛夷花咲く
へ書を捨てて街へ出ようまだわれに出かけるところ三つ四つはある
けふの外出そとで試運転なれば帰らむか梅田界隈ひとまはりして
「万葉集」受講者一人増ゆといふ小さなわが町に改元の波
新しくドイツ語辞書を買ひ励む姫八十二、さくら咲く日に

石の天地

池下寿子 和歌山

冬眠から覚めしごとくにトラクター溝蓋ガタガタ鳴らしつつゆく
ハズキルーペかけて夫は身をほぐす大好きな孫の大好きな魚
母の家より移したる黄楊の木の根にくつついて十葉来たり
枝見つめ煙草くゆらせ植木屋は剪定までのしばらくを立つ
天と地が石にはあると撫でながら庭師は紀州の青石を積む

若葉明かり

宮本君子 広島

法蓮草の胡麻和へ作りその夜更け突如逝きたり藤井郁子さん
月の無き今宵は寒く星光りむねにほろほろ藤井郁子さん来る
ふるさとの歌会に十年通ふなり時雨、夕立、日照雨の三次
花終へし若葉明かりに手足冷ゆ沓きこひびとも老いつつあらん
夕月のうつすら透きてのぼり来ぬ亡き人今はいづこあたりか

遠き春雷

栗山由利 福岡

Uターンしてきた冬の不意打ちにくびをすくめる桜とわたし
いつもよりちよつと濃いめのハイボール飲みたい今日のわたしはオトナ
ひとり夜はちよつと濃いめのハイボール飲みつつ遠き春雷をきく
あめかぜに晒された文字に呼び込まれまよはず頼むへこぼ天うどん
青空に辛夷の花が映える道 白い靴履く足元はづむ

ほどほどの幸

海老原光子 宮崎

日の少し長くなりたる夕ぐれにとほまはりして見る紫木蓮
ふわわあと大欠伸して背伸びして日向ほつこの野良猫去りぬ
ルビー色のワインとぽとぽと注ぎをりほどほどの幸満たす思ひに
新月の闇にひたすら散る花の点・点ドットの増えゆく芝生
佐保姫が呼んでゐるよと連れ出して飛花浴びるなり百二の父と